

白鳥天人になった子供たちの物語

八代 穰

(導入部…能「羽衣」の一部)

一

駿河国の清水に三保の松原という処があります。そこは青い海と松林が続き、打ち寄せる波間から富士山が望まれる美しい処です。昔々この地に白鳥天人が舞い降りて来て、沼で水浴びをする慣わしがありました。

(演出…波の音、鳥の鳴き声と水遊びの音)

若い漁夫の白竜が船からあがると、松の枝にかかっている羽根の形をした衣を見付けます。

「これは、これは、何と美しい衣！」と言いながら、白竜は白鳥の毛で編まれた衣を持ち帰えろうとします。すると、どこからともなく高貴な姿をした娘が現れました。「もしもし、それは私が身につけるもの、それがないと天に上れないのです。どうぞお返してください」

娘は悲しそうな顔でいいました。白竜は、娘が可哀想になり衣を返そうと思いましたが。でも娘はとても美しかったので、すぐに別れるのは惜しい気持ちになり、

「舞を舞ってくれたら、衣は返す、どうかな」

といました。娘は、

「宜しゅうございますとも、喜んで舞を舞ってご覧にいきます」

娘は衣を返してもらい身につけると、あれ不思議！ 白鳥の姿に変わりました。

「娘が、白鳥になったぞ」白竜は驚きの声を上げました。

(演出…おぼろ月夜の曲が流れる)

白鳥は菜の花で黄色に染まる草原を舞台に、『天の春』の舞を舞いました。(これが天女の舞なのか)と白竜はあまりの美しさに思わずうっとりしました。舞終えた娘は、「それでは、ご機嫌よろしゅう」

娘は飛び立とうとします。娘が好きになった白竜は、あわててとめました。

「舞を見せてくれたお礼に、ご馳走したい。私は漁師の白竜と申す」

「ご馳走などと、私はもう天に上りますので・・・」

白竜は、断る娘の手を引き家に案内しました。そして山海の珍味を並べ、草笛を吹き鼓を打って歓迎しました。

「白竜様、今までこんなに美味しいもの、食べたことなかったわ。それにこんな美しい音楽を聞いたことも・・・ああ、とても楽しかった！」

白竜はこの娘とずっと一緒にいたい気持ちになりました。

「もう天に帰らないで、私と結婚してください」

と結婚の申し入れをしたのです。娘は人間との結婚などは考えたこともなかったのに、びっくり仰天、途方に暮れてしまいました。

「結婚して下さい、貴女を幸せにします」

白竜は、何度も頼みました。

「私は天女なのよ、結婚はお断りします」

結婚したら天に帰れなくなるわ。でも白竜様ってとても優しく素敵な方、私好きになってしまったわ・・・どうしよう！ 娘は松原が続く砂浜で悩み続けました。

その時数羽の白鳥が、天を目ざして飛び去って行く姿を目にしたのです。

「あッ、お友たち・・・」

思わず声がでました。その姿が雲間に消えると、娘は立ち上がり、

（私、白竜様と）そうつぶやき、白竜の許に戻りました。

「少しの間なら、天の神様が許して下さいと思います。白竜様、私、小町と申します」娘は白竜との結婚を受け入れ、羽衣を預かってもらう事にしました。

「白竜様、この衣私がまた天に帰る時は返して下さいね」

「ああ

、いいとも・・・白竜は日本一美しい女性と結婚したぞ」

「まあ嬉しいわ、私、とても幸せよ」

小町はほほ笑み白竜の手を握りしめ、白竜はその手にキスをしました。

二

白竜は毎日漁に出て、捕れた魚を清水の市場に持って行きました。市場には大勢の村人が集まっていて、自分が持っているものと欲しいものを交換するのです。白竜も魚と交換に、米や野菜などを手に入れました。

二人の間には幸せな日々が続き、やがて女の子が生まれました。白竜はとても喜び、

名前を三保の松原に因んでミホと名付けました。小町はおっぱいが出ないので、白竜は飼っている山羊の乳をミホに飲ませ育てました。数年経って、今度は男の子が生まれました。白竜は富士山に因んでフジオと名付けました。フジオも元気に育ちました。いつしかミホは親や弟思いの心の優しい少女に、フジオは腕白だが知恵のある少年に成長しました。

ミホは母が織物をしているので山羊の世話と炊事の手伝い、今ではそれもすっかり上手になりました。

(演出…家族の会話)

「私のつくったうずらの卵焼きめしがれ、山羊の乳でつくったチーズもね」

「ミホ、このチーズ、栗が入っていて美味しいよ。ね、お母さん」

「そう、とても美味しいわ、炊事を手伝ってくれるので大助かりよ」

納屋のかごの中には、フジオが裏山で捕らえてきたうずらと兎とキジがいました。フジオは生け捕りの名人なのです。

「お父ちゃん、この兎、子供を産まないのかな」

「どれどれこの兎オスだ、今度メスを捕えてこいよ、フジオ、ハハハ」

「フジオ、私ね、山羊の赤ちゃんほしい」

ミホと一緒に遊べる子山羊が欲しいのでした。フジオはキジを鳥かごから出して、

「このキジ、キツネに追われていたのをボクが助けてあげたのだよ。子供だからまだ飛べないけど」

「どれどれ、オスのキジだよ。成長すると羽根が美しい鳥になる。フジオ、今度お父さん漁に連れて行ってやるぞ」

フジオは、目を輝かせました。

「お父ちゃん、ホントに、早く舟に乗って魚を獲りたいな」

「海には色々な魚がいる。中には海坊主や人喰いサメや鯨など怖い魚や動物もいる。もっと怖いのは嵐だ」

フジオは、父の話にとっても興味をそそられました。

「男の子はいいな、お母さんは織物のお仕事が忙しいし、私、つまらない」

小町はミホの相手をしてあげられないのを、心苦しく思っていました。でも織る織物は評判がよく注文が多かったです。夏が近づいた頃でした。

「お父様、ミホもフジオもよくお手伝いしてくれます。ご褒美に京の都に連れて

行つてあげたらどうかしら」

「急にご褒美だなんて。でも京は遠いよ。遠足なら富士山がある。近いしフジオも登りたいといっている・・・」

小町は京見物なら、ミホは大喜びするだろうと夫にいったのでした。白竜は男子にばかり気に掛けていることを反省し、妻の意見を入れ京見物に連れて行くことに決めました。小町がこのことを子供たちに話しました。

(演出・中高生の修学旅行京都)

「京の都ってどんなところかしら？ そうだわ、山の向うのまたもつとその先の太陽が上る方角の島よ。そこには竜宮城があつて美しいお姫様が私たちを歓迎してくれるわ。窓から昼のお月様やお星様が見えるの。それはとても幻想的で素敵なところなのよ、きつと」

フジオも、姉に負けずとばかりに、

「お姉ちゃん、そこはね、清水の海のずっと向こうにある島だよ。その海にはお父ちゃんがいった海坊主や人喰いサメや鯨が泳いでいる。島には色々な植物が生えていて、怪獣がいる無人島なんだ。ボクね、その島を探検する。怖いけど楽しいだろうなあ、早く行つてみたいよ」

母の小町が地図を広げました。

「まあ、ミホったら、昼のお月さまだなんて、ホホホ・・・京は島ではないの。ほら、三保の松原から遠州・三河・尾張・近江など色々な国を通つて行くの。お父様が、馬車を用意して下さるそうよ」

入口に空飛ぶ二頭立ての立派な馬車を用意されました。

「夜この馬車に乗れば、朝には京の都に着く。フジオ、天馬が空を駆けてくれるぞ」

「馬に翼があるんだ。すごいね、お姉ちゃん」

「眠っている間に京の都に着くなんて、夢みたい！」

四人は馬車に乗込みました。御者はお父さん、手綱を振ると馬車は夜空に向つて飛び立ちました。

「まあ、月がこんなに大きく近くに見える。ミホ、行つてみたいでしょ」

「私はね、天の川に輝いている星の方がいいな、フジオは」

「ボクね、早く無人島に行つて探検したいよ」

明け方になって湖が見えてきました。

「琵琶湖だ！ もうこの先、京の都に入るぞ」

しばらくして、父が湖の向こうを指さす先に、五重塔や寺院などの建物が見えてきたので、ミホとミホは変な顔をしました。

「これが京の都なの？ 竜宮城ではないしお姫様もない。昼の月もお星様も出ていないわ。面白くも何でもないよね、フジオ」

「そうだよ、怪獣がいる無人島じゃないじゃないか。お姉ちゃんという通りだ！」
やがて二頭立ての馬車は、都の真中に到着しました。

「お前たち、竜宮城はないし怪獣はいないけど、これから面白いことが始まるぞ」
広い道路に立派な家々が並んでいます。馬車は果物や野菜を売る店、塩や種を売る店、魚や干物、干肉を売る店、着物や家具を売る店などが立ち並ぶ賑やかな通りに出ました。

大道芸人の回りに、大勢の客が集っています。御供を連れた束帯の貴人が牛車に乗って通り、役所の門のそばに弓や刀を持って武装した兵士が見張っています。屋敷内では蹴鞠（鹿の革でつくったボールをける遊び）に興じたり、子供たちが小弓の的当てをして遊んでいます。

「清水にはない面白そうな通りね、どこで降りてお食事するの、お母さん」

ミホは、興味深げに周囲を見ながら言いました。

「目的地に着くまで待ちなさい、もう少しですからね」

「そこはどこなの？」

ミホは首をかしげました。

「あの小弓の的当て、ぼくもやってみたいよ」

フジオが飛び降りようとしています。

「このまま馬車に乗ってなさい、鞍馬の森に行ったら降ろしてあげますから」

小町が京の都に行く本当の目的は、京見物ではなかったのです。表向きは子供たちへのご褒美・・・鞍馬の森にある天白鳥神社にお参りすること、そして自分の行動を天の神様に報告することでした。ですから道すがら、下車して子供たちを遊ばせるなど飛んでもない、罰当りになると考えたのです。

（鞍馬の森ってどこかな）フジオはそう思いながら、降りたくて足をバタバタさせています。八坂神社がある大通りに入ると、宵山の駒形提灯や行燈が通りに飾られ、祇園祭の山鉾巡行が行われていました。半天姿の若者が、ワッショ・ワッショとか

け声をかけて山鉾を引いています。その上からピーヒョロ・ピーヒョロ、ドンドン、笛と太鼓の祇園囃子が聞こえます。鉢巻とはっぴ姿の小若（子供）チームが、それに合わせて綱を引きながら通ります。

「貴方、大変！ 子供たちが・・・」

ミホとフジオが、母の制止も聞かずに車から飛び降り、行列の中に入ってしまったのです。沿道にはたくさんのお見物人が、山鉾が通ると手を振ったり、声をかけたりしています。

子供の姿はどこにもありません。

「おや、新入りだね、さあ、これを着けなさい」

町内会のおじさんが、ミホとフジオにはっぴ、たすき、それに鉢巻をくれたので、二人はそれを着けて小若チームに入りました。

「お姉ちゃん、似合うでしょ」

「京の子みたいよ、誰かが私のことかわいいねって。ホホホ祇園祭って格好いいわ」
ピーヒョロ・ピーヒョロ・ドンドン、行列が進みます。路地からいくつもの山鉾が、ワッショ・ワッショと声を掛け合い、八坂神社めざして大通りに入ってきました。

二人は真っ青になって、雑踏を探しますが見当たりません。しばらく経ってやっとのことで白竜が、山鉾の前にいる子供たちを見付けました。

「ほら、あそこ、みんなと綱を引っ張っている」

「ああ、迷子にならなくてよかった、貴方」

小町も子供たちを確認すると、突然大地にひざまずき天を仰ぎ見ました。

「天の神様、これから天白鳥神社へ参りますが、子供たちの不作法をお許しください」

と天の神様をお願いしたので。それが済むと呪文から解かれたように笑顔になりました。

「・・・神様からお許しが出てよかった。子供たち楽しそう、みんなが輪になって、あら、ミホ、お饅頭を食べているわ、美味しそう・・・まあフジオったら、お団子を両手に持ってお行儀わるい」

「おや、今度は踊り都踊りだよ。小町、芸子さんだ」

「まあ綺麗に着飾って、花が咲いたよう！ 貴方も半天をいただいて一緒に踊った

ら・・・」

「見ているだけで楽しいよ。何と言っても京は、天子様がおられる日本の首府だから何事に付けて素晴らしい。小町、京見物に来てよかったな」

「そう、京見物、私たちの新婚旅行なのよ。貴方、こんな楽しいことはじめてよ！三保に帰らないでずっとここにいたい気持ち、ホホホ・・・」

（演出…小町の哀しみ）

華やかな祭りを眺めながら、小町は心中ふと思いました。

（人間の社会って、何てこんなにも素晴らしいのでしょうか。優美な建物が立ち並び、碁盤目のような道路を飾り立てた牛車を通る。通には色々な店が軒を連ね、着飾った大勢の宮人たちが行き交い買い物を楽しんでいる。木立が繁る楼門では宴の盛り・・・そしてこんな豪華な山鉾巡行の祭りがあり、子供たちも祭りの輪の中に入り、夫も心から満足そうさ。何と羨ましい情景でしょう！それに比べて白鳥天人の世界には、こんな夢のように楽しい催しはないわ。三保の松原の沼で水浴びしたらすぐ天に帰るのに・・・私はいつまで楽園のようなこの「地上」に居られるのかしら・・・）

小町は何とも寂しい気持ちになるのです。

三

夕方になり各町内を回っていた山鉾巡行が止まり、笛と太鼓の音も止まりました。小御所にいた白装束の神官たちが、松明が焚かれた八坂神社の山門に入って行きました。

「貴方、これから鞍馬の森にある天白鳥神社に行ってくださいな」

この神社は、天から舞い降りて亡くなった白鳥天人を祭る社でした。

（演出…神社の不思議な光景）

暗い森の中の道を進むと明かりが灯る神社があり、中に入ると中央の祭壇に大きな月が描かれ、冠を戴いた大白鳥（神様）の絵が飾ってありその目からは、茜色の不思議な光が出ていました。母にならって子供たちも、鈴を鳴らして神様を拝みました。

「何だか怖い絵だね、お姉ちゃん」

「そう、こんなに大きい白鳥見たことないわ。きっと白鳥の王様なのよ」

父の白竜も驚きの表情で絵を見入っていました。しばらくしてフジオが、母が居ないのに気付きました。

「お母ちゃん、どこに行ったのかな」

そう言いながら探しに行くと、一羽の白鳥が絵に向いお祈りしていました。フジオがそばに行くと、どこからともなく母の声がしました

「ここは子供が来るところじゃないの、あっちに行っていないさい」

フジオはその声に怖くなり、その場を逃げ出しました。

「どうしたの、驚いたような顔をして」

フジオは姉に問われても、黙っていました。

（お母ちゃんが白鳥になっている・・・）フジオにとっては、とても不思議な出来事でした。馬車に戻ると子供たちは、魔法にでもかけられたようにスヤスヤ眠ってしまいました。

「京見物に満足したことでしょう。貴方、また三保の松原に戻ってください」

白竜は妻にいわれるままに、天馬を操り天空の星空を駆け抜け家に戻りました。

（演出…天の声と子供たちへの告白）

それからまた数年一家に幸せな日々が続きました。そんなある日のこと、雲間から天の神様が現れました。

「小町よ、地上に下りてずいぶん月日が経った。白鳥天人であることを忘れては困る。すぐ天に戻りなさい」

天の神は厳かに小町に告げました。いつかはと不安に思っていたことが現実になったのです。小町は地に平伏して申し述べました

「神様、申しわけ御座いませんでした。すぐに天に上ります」

小町は神様にお詫びして、仰せの通りにすると答えたのでした。

（可愛いミホとフジオ、最愛の夫を残して天に帰れない。でも私は天人、帰らなければ）小町はもうすっかり人間の母、人間の妻のつもりでいたのです。しかし白鳥天人は、絶対に天に戻らなければならない宿命なのです。このことを子供たちに打ち明けたらショックを受けるに違いない。小町は思い悩みました。でもそうしなければ！ 月明かりがする夜半、小町は子供たちに言いました。

「ミホ、フジオ、よく聞きなさい。お母さんね、天に帰らなければならぬ。今まで黙っていたけど、お母さんは白鳥天人なの」

母に突然天に帰る、自分は白鳥天人だと言われたミホ（母が天に飛んで行ってしまい、目の前から消えてしまう）あまりのことに失神しそうになりました。

「白鳥天人だって？ 天に帰る？ 一体どういうことなの、突然そんなこといわれどもミホには何のことが全然理解できないわ、お父さんも一緒？」

「お父様は人間だから・・・お母さんは天から舞降りてきた白鳥天人なの、人間じゃないの。天の神様から早く帰るよういわれてね。悲しいけど、みんなとお別れする時が・・・」

「お母さんは人間じゃなく、白鳥天人だて？ そんなの嘘に決まってるわ。天ってどこ」

なのよ、ねえ、どこなの、私たちは行っちゃいけないところなの」

ミホは目に一杯涙を浮べて、必死になって聞きました。

「お母さんはね、遠いあの月の世界に住んでいるのよ」

「えッ、月だって！ なんで、なんで、月なの」

こんな悲しい事、ミホは人生が終わってしまうように思いました。母の話と姉の驚く顔を見て、フジオも真っ青になりました。

「お母ちゃんは、月から来た白鳥天人？ だって羽根はえてないじゃないか、そんなの嘘だ、嘘だ。でも帰っちゃいやだ、絶対帰っちゃいやだ！」

フジオは、わあわあ泣きながら母に抱きつき、

「お姉ちゃん、ボク、お母ちゃんと離れたくない。だからボクも白鳥天人になって、お母ちゃんと一緒に月に行く」

フジオは母の体にしがみつき「白鳥天人、白鳥天人」とうわ言のように言いました。

「私も白鳥天人になりたい。どうしたらなれるの、ねえお母さん」

子供たちは、必死になって母に問いただしました。

（白鳥天人になりたい！）とせがむ子供たちに、母の小町は困ってしまいました。

「今すぐにはねえ・・・まずお母さんが、天に帰って神様からお許しを頂いていてから

でない」と

その時父の白竜が漁から帰って来ました。そして子供たちが涙を流し落胆している様子を見て、（これはきつと妻が天に帰ると言いだしたに違いない、でもなぜ今時に）と訝ったのです。

「天の神様が、戻るようになって、今お告げがあったの」

「お願いだ！ 帰らないでくれ。子供たちがこんなに悲しんでいるではないか。なあ、小町、このまま一緒に暮らそう」

白竜は（彼女との出会いを思い出しながらも）懇願しました。でも小町の決心は、少しも揺らぎませんでした。

「お父様、預かって頂いた衣お返しくださいます、お約束しましたね」

言われた白竜、しぶしぶ奥へ行って長持の中にしまっていた衣を持ってきました。

小町は受け取ると、子供たちの頭をなでながら、それを身にまといました。

「天に上っても、直に迎えにきますから心配しないで待っていてね」

十五夜の月が照らす中、小町は突然白鳥天人の姿に変わりました。

「あッ、鞍馬の森で見たお母ちゃんだ」

フジオは大声をあげました。これで本当に母が白鳥天人であることを悟ったのです。その時にわかにかに雲間が明るくなり音楽が聞こえてきました。

（演出…もみじの歌が流れる）

白鳥天人はその音楽に合わせて、秋景色が広がる三保の松原で『天の秋』の舞を舞いました。舞い終わるとくちばしを空に向け、

「カーウ、カーウ」

と鳴きました。その鳴き声はまるでトランペットが奏でる音のようで、紅葉と緑が織りなす草原に響き渡りました。音が止むと天空の彼方から、茜色の光線が白鳥を照らしたのです。雲間に大白鳥が飛んでいるのが見えました。

「あッ、あの絵の目から出ていた光線と同じだわ」

ミホも母が、本当は白鳥天人だと理解したのでした。

「色々お世話になりました。楽しい夢のような日々でございました。小町は、これで愛しい貴方様とは永久のお別れでございます。もっともっと長く一緒に暮らしたかったのに、でもこれは白鳥天人の定めでございます。どうか御達者で、さようなら」
白竜は妻小町の離別の言葉に、ただ茫然としていました。これを最後に飛び立ちました。子供たちがあれよあれよと言っている間に、月明かりの青い富士の高嶺を越えて、白鳥天

人ははるかかなたへ消えて行ってしまいました。

(演出…子供たちの嘆きと歓喜)

ミホとフジオは、毎日空を仰いで、

「お母さん、早く帰って来て！」

「お母ちゃん、帰って来て、ボク寂しいよ！」

と泣き叫び続けました。約束したのに、お母さんは月から迎えに戻って来てくれません。白竜は漁にも出ずに、子供たちを慰めようとしています。でも子供たちはただ泣いているばかりで、一家の悲しみは深まるばかりでした。三ヶ月ほど経って雪の降る季節になりました。ある晴れた日の夕方、白竜は西の空から銀色に輝いて降ってくる雪を目にしたのです。その雪は蛍が飛んでいるみたいにピカピカ光りながら、ふわりふわり降りてきました。

「これは冬の蛍ではないか、いや蛍ではないな。これは西日に照らされて光る白鳥の羽毛だ。天から白鳥の毛が降って来るとは、不思議なこともあるものだ。これは不吉なしるしかもしれない・・・」

白竜の顔は、みるみる曇りました。羽毛は夜になると竈の煙突から部屋にも入って来て、眠っているミホとフジオの体に降り積もっていきました。そしていつしか子供たちは鳥の形になり、朝には白鳥の姿になっていました。人間から白鳥に変身したのです。父白竜の体にも羽毛が降り積もりましたが、なぜか白鳥にはならず人間のままでした。子供たちはお互いを見返しました。その途端、顔はみるみるに歓喜の表情に変わりました。

「ワイー、お姉ちゃんとボクは、お母ちゃんのような白鳥天人になったんだ、空を飛べるぞ」

白鳥になったミホとフジオは、羽根をひろげ得意になって草原や砂浜を飛び回ります。ミホは、天を仰ぎみて目を輝かせ、

「お母さんを待つより、お母さんのところに飛んで行きたいね」

「うん、でもお母ちゃんは、どこにいるのかな」

ミホは弟の横でうなだれている父に気付きました。そして（お父さんにも羽毛が積もったのに、何故白鳥にならないのかしら）気になったのです。でもそのことを、父に聞く勇氣はありませんでした。

風は陸から海に向かって吹いていましたが、夕方になり強い海風にかわり潮が満ちてきました。月もうつつすら輝き始めました。すると突然、天空の彼方から茜色の光が

二羽の小白鳥を照らしました。その上空には、一羽の白鳥が飛んでいるのが見えたのです。光はその目から出ていたのです。

「あれ、お姉ちゃん、あの飛んでいる白鳥見てごらん、きつとお母ちゃんだよ」

白鳥はゆっくり旋回して光を出していたのです。

「そうだわ、お母さんよ、お迎えの合図なのよ」

この様子を見ていた父の白竜も、びっくりしました。

「ああ、やはり小町が子供たちに約束した通り、迎えにきたか」

迎えには来ないだろう、来るはずは無いと思い安心していたのです。

「お父さん、私、お母さんのところに飛んで行きます」

「ボクも、お姉ちゃんと一緒に行く」

姉弟は羽を広げ、舞上がりしました。白竜は後を追いかけてましたが・・・二羽の小白鳥は光のラインに従い飛んで行きます。あまりの突然の出来事に、白竜は呆然として浜辺に座り込んでしまいました。

「あ、みんな天に上って、俺はまたひとりぼっちになってしまった」

白竜は、寂しそうに飛び去った空を眺めてつぶやきました。しばらく経って、また浜辺に舞い戻って来ました。母から、お父様にお別れの御挨拶をなささいといわれたのです。

(演出…ホタルの光の歌が流れる)

「お父さんとお別れしたくないけど、今までのようにお父さんと一緒に暮らしたいけど、ミホは白鳥天人だからお父さんとお別れするしかないの。お母さんを愛し、私とフジオを可愛がってくれてありがとう。天に上ってしまうと、もうお父さんと会えないことが一番悲しい。三保の松原の生活、京の旅行など色々楽しいことがいっぱいありました。月からも青と緑の地球が見えるはずだから、お父さんを見付けられるかも知れないわ。ミホはお父さんの事、いつまでもいつまでも忘れない、さようなら」

ミホの大きな目から、涙があふれました。

「お父ちゃん、うずらと兎とキジのお世話頼むね。京の都に連れて行ってってくれてとても楽しかった。またみんなで行きたい・・・でもお父ちゃん、ボクはお母ちゃんの子供で白鳥天人なんだ。だから月世界で暮らすけど、元気でいてね。お父ちゃんと漁が出来ないのがとても残念だけど、地球と月は兄弟だから十五夜の満月にボク

を探してね。きっと見つかると思う。ボクは男子の子だから、さようならをいわない……」

フジオは涙をこらえて、父に最後の別れの挨拶をしました。白竜は腕で涙を拭いながら、

「ミホ、フジオ、天でお母さんと末長く幸せに暮らすんだよ。お父さんに会いたくなったら、また三保の松原に舞い降りておいで……」

飛び去って行く白鳥に向って、白竜は顔をくしゃくしゃにして叫びました。そしてその姿が富士の峰に隠れて見えなくなるまで、手を振っていました。

（ある養老院のルーム）

白竜は、妻や子供たちを思い出しては涙を流し、漁に出る気力もありませんでした。そしてつくづく自分の運命を思ったのです。もしあの場所で美しい白鳥天人の小町に会うことがなかったら、彼女と結婚することはなかったしミホもフジオも生まれなかった。これから先も、自分は月を眺めて物思いに耽り暮らすのだろうか。そう思いつつも一方では、自分は人間であって天人ではない。もう女々しく嘆くことはよそう、そう思うのでした。そう思いつつも、月夜の晩はひたすら月を見て思い出に耽るのでした。こんなある日のこと、白竜の家に知合いの老人が訪ねて来ました。「白竜、妻や子供たちが居なくなって寂しいだろう！ わしらの処（養老院）に顔をだしたらどうか。気も紛れる……」

白竜は老人の呼びかけに、現実を引き戻された気持ちがありました。

「一度に老けてしまったようで、じゃあそうさせて頂きますよ」

老人が去ると白竜はいつもの様に家畜小屋に入り、動物たちと会話をしながら餌をやり一人身の生活をしみじみ寂しく思うのでした。養老院に行くと、みんなが白竜を暖かく迎えてくれました。

「奥さんと子供、急に居なくなつたてな、どうしてだ！」

白竜は、今までのことを静かに話し出した。

「そう言えば、天女は羽衣を隠されて天に帰れなかったとか。そんな芝居見たことあつたな、でも天女は白鳥ではなかった」

「京見物か、羨ましい。わしらまだお伊勢参りにも行っておらんがのう」

「秋に夜空を見上げた時、白鳥の形をした星座が見えることがある。そこから白鳥が地球に舞い降りたと言う話がある。妻になった小町は、その白鳥の一羽だったかもしれない。だからまたその星にもどったのさ・・・」

白竜は老人たちの話にも耳を傾け、話を続けた。

「ある日のこと、妻に天の神様から早く戻ってくるようお告げがありました。妻は泣き騒ぐ子供たちをおいで、天に帰りました。天の神様は、子供たちを不憫に思われたのでしょう。白鳥天人に変身させてくれたのです。妻は喜び勇んで子供たちを迎えに来ました。そして一緒に天に帰りました」

「白竜、お前も一緒に行けばよかったのになあ、どうして行かなかったのかい」

「私もそうしたかったのです。でも天の神は許してくれなかったのです。でもみなさん、行く行く私も、年老いて天に召されます。ですから妻子と再会出来ますよ」
「そうさな、天国に行ったらまた女房子供に会える。俺たちだって、死んだら煙に乗って天国に行く。そしたら親戚縁者にまた会える」

白竜は天を仰ぎ見ながら、老人たちの話に頷いたのでした。(了)